



将来を見据えた自己研鑽

岩田 浩明

岐阜大学大学院医学系研究科皮膚科学教室教授

およそ12年ぶりに母校の岐阜大学に戻って仕事をできるようになりました。学生と接する時間をもっとも大切にして、楽しく過ごしています。僕自身は学生時代や研修医時代には、なかなか将来像が描けず日々を過ごしていました。幸いにも医局人事の転勤をきっかけに専門領域をもつことができ、将来の方向性が決まりました。これまで留学を含めた何回かの転勤を経て多くの先生・学生・研究者と出会いながら、「将来像を描く」ことの大切さを学びました。

学生と接していると、自分とはまったく異なりしっかり目標をいえる学生にも出会うこともあります。「将来教授になりたいです!」と宣言する学生、「留学したいので話を聞きたい」と部屋を訪ねてくる学生、「研究生を募集していますか?」とメールをしてくる学生など、とても頼もしく感じます。このような学生には希望を叶えられるように、こちらも最大限のサポートをしてあげるべく対応しています。

自分の経験から明確な将来像が描けない人に向けた助言はいまならできます。「いかに将来の選択肢を減らさない人生選択をするか」ということを伝えたいです。僕は、入局早々に「大学院は興味ありません」と、いま思うと非常に大きな将来の選択肢を減らしてしまいました。大学院がどのようなところかもわからないまま拒否した自分を恥ずかし

く思います。人事など自分では選択できないこともあると思います。しかし選択肢があったとき、5年先・10年先の自分を思い描いて選択してほしいです。「働き方改革」が叫ばれる昨今で、どの職場でも拘束時間(以前も拘束しているわけではありませんが)が短くなっています。皮膚科医として働き始めた専攻医の先生たちをみていると、研修開始時点では大きな差はありませんが、1年後には明らかな差が出てきます。指導医は平等に機会を与えてあげるように心がけますが、論文・学会発表など自己研鑽になる時間はなかなか強制できません。どんなことも「将来、何かに役立つかもしれません」、ぜひ自分に来たチャンスを最低限でこなすのではなく大きな発展につなげるように自己研鑽に積極的になってほしいです。

先に述べた「教授になりたい学生」や「留学したい学生」には、学生時代からでもいいので英語論文を1つでも多く書いたり、英会話の時間をつくるなど助言をしました。もちろん岐阜大学皮膚科に勧誘して教室を発展させることを一番の目的にサポートしていますが、彼らがほかの教室・診療科へ進んでも活躍してもらえることを願っています。